

発行所 上高井教育会
発行人 上高井教育会理事長
山 岸 徹
編集人 会報編集委員長
斎 藤 章 子
印刷所 須 坂 新 聞 社

齋藤義男

合法的な学習の時間を軸にして、それとのつながりをつけること

の三点だ。繰り返すが、これらのことは、子どもからの教育的ニーズという意味で「学びの成立」のために必要なことなのだ。だから、カリキュラムの編成にあたっては、これらの視点をふまえて考えていくことが望ましい。

現在、これらの三点をふまえて、十一月二十二日の授業に向けての準備が進んでいる。

以上、三つの成果が挙げられるが、田中先生がお招きしたり、また多くの先生方の貴重なご意見をいただいたのりしての一番の成果は、というものの「カリキュラム」について、一人一人の職員が真剣に考え、皆で知恵を出し合い、「井上小のカリキュラムを何と子どもたちのものにしよう」という情熱が生まれたことである。

(井上小)



豊丘小学校

とりの自立への課題はそれぞれ違っている。しかし、このような地域の環境を生かし、多様な活動の実践を積み上げていくことで、その子その子の伸びようとする育ちの芽を支えていくことができると考える。これらの活動の中で育った、伸びやかな感性や夢中になった探究する力人や物、自然や社会と関わる力は、この子ども達が中・高学年へと進む中でさらに輝いていくことと思う。

豊丘の子ども達は、離れ山を始めたとした地域の豊かな自然に大きく育てられていた。

(桜井直子)

教育会だより

離れ木の敷い思いの場所であつた。自然の木や葎や地形を生かしながら、忍者の修行・なぞのけもの道・的当て・宝さがし等のコーナーを作つていった。子ども達は、各々のコーナー作りをする中で、自然や友との関わりを学び、大冒険をするように、自分や友達のコナーで夢中になつて遊び込んでいくことができた。また、今年はさらに離れ山での活動を発展させ、一・二年生合同で単元を組んでみた。異年齢の友達とグループを組み活動すること、クラスの中では見られなかつたような活躍をする子や、相手に思いを寄せて活動しようとする子ども達の姿が見えてきた。自然観察インストラクターの方にも来ていただき、森の中で遊ぶルールを学び、秘密基地やアスレチック、小物作りなど自分達のコナー遊びの中に生かしていくことができた。遊びが発展していく中で、今度遊びが発展していく中では保育園の友達も招待したいと子ども達の願いは広がってきている。

低学年の子ども達は、それぞれの経験にまだまだ大きな差があるものである。そして一人ひと

— 329 —

技術・家庭

情報教育のあり方

東 中 学 校

中学校学習指導要領が本年度から完全実施され、本教科は、「技術」「家庭」の二つの分野に再編された。技術分野は、「技術」とものづくり、「情報」とコンピュータの二つにまとめられた。新たに情報とコンピュータが必修となり、教科の学習の重要な柱となった。

本校では、総合的な学習の一年生前期においてメディア学習を位置づけている。そこで、このメディア学習と情報とコンピュータの学習を関連付けて展開しようと考えた。

今までの「情報とコンピュータ」の学習を振り返ってみると、生徒のコンピュータ利用に対する興味・関心はあるものの、アプリケーション(応用)ソフトの操作、ゲーム、インターネット(Webページ)閲覧等の学習が通一遍で、深まったものでもあったため、活用したいこなしという満足感を得られていなかった。

昨年度、本校一年生は総合的な学習(AZUMA TIME)の学習のまとめとしてレポート作成を行った。ここで生徒たちは、日本語ワープロ、イメージスキャナ、デジタルカメラ、WEBページからの画像の収集等既習事項を自分なりに総動員して苦労しながらもレポートを立派に完成させていた。生徒は、満足感や成就感を味わっていたように見受けられた。

「教育課程研究

合 教育課程研究協議会は出発点

総

旭ヶ丘小学校

『生きる力』を育むことが、新指導要領の大きなねらいである。本校では、「人・もの・こと」へ自らかかり続けることを「生きる力」と考え、それを研究の出発点としてきた。一人ひとりが、自分なりの願いや思い、課題をもって追究する姿の中に『生きる力』をみるのである。

児童一人ひとりがどのようにかわり続けているのか、教師は活動のあらゆる場面でもて支援していくことが必要である。それには、「つける力」を明確にした評価規程が必要となる。私たちは、旭ヶ丘の実際の子どもの具体的な姿を評価するため、過去二年間の本校四・五・六年生全児童の指導要録(総合的な学習の時間関係の所見内容を整理・集約し、評価の窓口を作成した。活動を立ち上げるときに「つける力」をしっかりと決めることで、授業の見通しを持てる。そして「つける力」こそ、いつも評価の窓口にしたことで、いつも評価の窓口に立ち返って一人ひとりをみつめることができる。同時に、教師は、自分の授業を評価できる。この評価規程を作成により、教師は「この活動で、この子につける力はなにか」と意識し、自分のあり方もみつめることができるのである。しかし、まだまだ精選・修正の余地があるので、これよりよいものとせず続けて検討し、よりよいものにしていきたい。この評価表が、少しでも各校の参考になったので

このことは情報教育のあり方や「情報とコンピュータ」の学習に対してヒントを与えるものである。情報教育は、技術・家庭科だけでなくカリキュラム全体を進めるべきものである。本教科が中核となつて身につけた技能等をAZUMA TIMEや選択教科、各教科の学習の中で活用を図ることにより情報活用能力の育成がより一層期待できる。

本研究を通して、次のことがらが大切と考えている。

①基礎・基本の定着を重要に考える観点から、内容を欲張らずに時間を十分確保する。

②必要に応じて、扱い慣れるまで繰り返したり練習したりする。特にキーボード入力は習熟させる。

③学習のまとめに例え、ワープロ、表計算、インターネットWEBページ閲覧など、試行錯誤しながらも自力でやり遂げるような学習を行わせる。

④総合的な学習(AZUMA TIME)と連携し、学習した内容を活用してレポートをまとめたり発表資料を作成したりする。このことにより情報活用の実践力の育成を図る。

⑤生徒の学習意欲の向上と指導の改善を目指し、評価の充実を図る。(自己評価、観察記録の蓄積、レポート、質問紙作品)

(高野喜久夫)

女性青年教師大会報告

～出会いのよろこび～

小林ゆかり

女性青年教師委員会では、今年度も「参加参画」ということを柱として進めてまいりました。私たち自身がやりたいことを私たち自身で企画運営し、そして参加し、共に学び、力をつけていくことだと思っています。

委員会では本年度の研究の方向について話し合いを重ねてきました。教育の世界から少し離れた広い研修を積むことが、教師としての力量をつけていくことにつながり、また、総合的な学習にも生かされるのではないかと考えました。そこで本年度はサブテーマを「広い視野に立ち、自分の世界を広げよう」と絞り込み、生き生きと輝きながら活躍されている講師の先生の生き方そのものに学ぶ研修をめざし、大会を企画運営してまいりました。

「生きること・出会うこと」と題しまして、新生病院緩和ケア病棟看護部長として活躍されている徳竹秀子先生にご講演いただきました。

「あなたは余命一ヶ月ですと医者から言われました。どんなふうに最後の時を迎えたいですか……」

ご講演は、新生病院ホスピスコーディネーターでいらつしやる小泉美壽先生の「イメージトレーニング」からどんどん引きこまれてしまいました。「どうやって死んでいきたいか」という問いは、どうやって生きていきたいかという問いにほかならないことを教えていただきました。

生き方を考えることが死に方を考えることであり、どのように生きたのかの積み重ねの向こう側に死があることを教えていただきました。ホスピスは生きて来る場所であり、最後の時に向かつて患者さんが自分らしく生き通すことをお手伝いする場所であるのです。

「自分の人生をデザインし、その人らしい人生を送ることができるよう援助すること、向き合っていくこと」それは、徳竹先生がおっしゃっていたように医療と教育はとてもよく似ています。

相手の目の高さに立つて成長し理解し受容し肯定し質問の機会を与え、希望を与える看護の姿勢は学校で求められている姿勢です。

ホスピスは人生最期、子どもたちは長い人生を歩む途上(入口)どちらも大切な時間です。他者の人生に関わる仕事であることを大切にうけとめたいと思いました。

今さらなぜ女性教師なのか、女性差別であるという厳しいご意見をいただきました。しかし、この大会は出会いを大切に、自ら学ぶ会です。来てよかったな。」と思える会がこの大会の意義でもあると思っています。

支えてくださった皆様本当にありがとうございました。(相森中)

協議会を終えて

英語科 コミュニケーションの壁を破る

小布施中学校

小布施中学校では「聞き手を意識しながら、自分の考えや気持ちなどが正しく伝わるように話す指導のあり方」をテーマに研究を進めてきました。今年度は教育課程の変わり目とあって年間計画や評価・評価方法といった、今までもう一步深く踏み込めなかった研究をさせていた、これができたと思います。

我が校は五年ほど前から三年生でのコース別学習を取り入れており、少人数制の授業が軌道に乗ってきたところだったので、その中の会話の上達を目的としたアップルコースでの授業を見ていただくことにしました。

ニュージーランドから来て一ヶ月半のティア先生に日本の文化を知ってもらうという「コミュニケーションを含む紹介をする」という目標を、生徒たちは紹介したいものを意欲的に探し出してきました。

生徒たちにはただ原稿を読むだけでなく、「相手に伝わる魅力的な紹介をする」とことを意識させ、ティア先生に語りかけながら、また理解の状況を確認することの大切さを感じさせたかったのです。

本時では、紹介文を書き上げた生徒たちがティア先生に紹介するためのグループ練習を行い、発表の準備をする場面を仕組みました。意欲も英

語力もある生徒たちではあります。大人でもそうであるように、自信のなさや気恥ずかしさもあってこれまでなかなか堂々と表現することができずにいました。発表練習のさせ方や時間配分にはもう少し工夫の余地があったと反省も残りましたが、目的意識を持って臨んだ生徒たちはとても生き生きしており、ティア先生からの質問を予想してお互いに質問し合ったり、声の大きさや目線なども意識したりし始めました。

発表の場面では、自分が用意したのを見せながら、紹介することを楽しんでいるように見えました。今ひとつ破れなかったコミュニケーションの壁を破ったなあという印象の生徒も数多く、取り組みに満足感と自信を持ち終わることができたと感じました。

生徒たちは生き生きとコミュニケーションを行うこと、意志疎通をする喜びを求めています。そこへのアプローチをどうするか、の少しい工夫で授業は楽しみながら異文化理解ができる手段となり、生き生きとした自己表現の場となるのではないのでしょうか。

今回の研究を通して、英語教育の楽しさと私達が担う役割の大切さを再認識することができました。

(西山 綾子)

社会科 子どもたちの予想を構造化する

日滝小学校

「りんごが売れない」ということを窓口の予想として最初に出させることで、他の予想を関連づけて深めながら、子どもたちの予想を構造化することができた。私はこう考えました。「本年度の教育課程研究協議会の社会科の授業に向けて行われた七月の事前研究会で指導主事の羽生先生がおっしゃった言葉です。私は授業者として須坂市のりんご生産が減少している理由を子どもたちに予想させたのですが、それぞれの予想を並列的に発表させたために、五十分以上の話し合いでいるんな意見をいっしょにしても何を調べるのかはつきりさせることができませんでした。社会科で自ら問題を解決する力をつけるには、子どもたちに自分の予想をしつかり持たせそれぞれの根拠を言わせれば調査方法の見通しを持てるのでは」と思っていた私たちは「目から鱗」という思いで羽生先生のお話をお聞きしました。

十月の授業では、五年生の社会科ということで子どもの生活に近い素材を選ぶのが大変でした。見えない物をはたして実感できるのか不安でしたが本年度の改訂の中で新しく加わった「コンビニエンスストアの情報活用」を取り上げました。

子どもたちに一番身近で業界最大手のSでは品物売ると同時に顧客の性別年齢まで

も入力し、六時間おきに送られてくる店周辺の天気予報をもとに発注をしています。そこで「何でもあるようにいて実は厳選されている品揃えの秘密」について考える場面を仕組むことにしました。重点研究会で思案のあげく「売れ」という予想を窓口に見えさせることで「どうして売れる物がわかるのか」という新たな疑問につながり、POSシステムなどの情報利用へと子どもたちの目を向けていくことにつながることができました。

研究の成果としては①予想を構造化することにより、個々の予想の練り上げができ、追究の見通しが持ちやすくなる②予想を練り上げる場面は子どもたちの既知知識や体験を再構成し新たな見方考え方に高める場であり「学び方を学ぶ」ということができた③学習カードは、話し合いでの思考の道筋を自分で振り返ることができるようになると有効であるということがあり、日々の授業の中で、一時間で問題を提起し子どもたちの考えを即座に読み取って構造化し練り上げを図る授業を成立させるには、教材研究をはじめ教師としての技量を高めることが必要不可欠です。今求められていることの重さを感じた一日でした。

(山本美香子)

本校の宝④〇 大切にしたい校庭の桜

高山小学校

高山村内に三つあった小学校（高井、山田、奥山田小学校）が統合されて高山小学校になってから、本年度でちょうど二五年になります。

近年、高山村は、春はしだれ桜、秋は松川溪谷の紅葉で知られるようになり、近隣の市町村だけでなく、遠くから観光バス等で訪れる人々が増えてきています。それにあわせて、村では、桜トレッキングや紅葉トレッキングなどを実施しています。

色や濃いピンク色の一重や八重の花を咲かせます。夏には深い緑が涼しげな木陰を作ります。秋には、葉が、赤や黄色に色付き、わたしたちの目を楽しませてくれます。初冬には、葉を落とし、焼き芋を焼く焚火の元になったりします。子どもたちや職員は、四季折々に桜と関わりながら学校生活を送っています。



本校の校庭の西側と北側には、開校当時に植えられた「そめい吉野」、「大山桜」などの桜が二〇数本あります。春には淡いピンク

(藤沢袈裟一)

火ばら 談義



相森中 大内奈美子

菜園の中の自然

阿部千恵子

教室のすぐ外に学級園があります。広さもほどほど、水道が近くて水やりも便利です。

春、子どもたちと旬の野菜を作っておいしいものを食べようと菜園にしました。シャベルで畑をおこし、堆肥と腐葉土を入れてうねたてをしました。植えたのは白菜キヤベツ・キュウリ・ナス・ミニトマト。白菜とキヤベツはすぐ青虫がつき、消毒しても二、三日するとすぐまた蝶や蛾がやってきて卵を産んでしまします。ところがある程度育った青虫たちはふつといなくなってしまうのです。鳥にでも食べられてしまうのでしょうか。

白菜を収穫した後にジャガイモを植えました。そこにどこから来たのかアマガエルが住み着きました。消毒すると一時的にいななくなりますが、またやってくる。ジャガイモの葉陰にいます。植木鉢の中にいて体の色が変わっていることありました。

キュウリとナスとミニトマトは生育不良で心配しました。ミニトマトは病気で枯れてしまいました。ひ弱なキュウリとナスを見て、肥料と水が足りないと思いついて下さった方がいて、たっぷり水を撒くようにし、追肥

をしたらぐんぐん成長し始めました。おかげでキュウリとナスは毎日食べることができました。大きくなったキュウリの棚に大きなカマキリが来ました。どこから飛んできたのでしょうか。いつの間にか二匹に増え飛んでくる虫たちを捕まえては食べていたようです。

夏が過ぎ、ジャガイモ、キュウリ、ナスが次第に枯れていきます。先日、最後のナスを収穫し、おやきを作っておきました。最後の最後までおいしい実をくれたナスの木に感謝。枯れた野菜を片づけると虫たちもほとんどいなくなりました。しかし、アマガエルだけは今も植木鉢の陰に潜んでいます。すでに畑の主のようです。

そろそろ大根が食べごろです。先ずはおでんにする予定です。できたら漬け物にも挑戦したいけれど、難しいかな。春用に絹さやをまいたら芽が出てきました。これも楽しみです。

子どもよりも担任が楽しんで家庭菜園化していますが、小さな畑の中にもいろいろな世界があり、季節ごとに変化しているんだなと妙に感心しているこの頃です。(井上小)

大道芸人に出会って

鈴木 紘一

昔、チンドン屋やサンドイッチマンがいて、個々の店の売り出しや客の呼び込みに一役買っていたが、今はその風情はない。

東京都は公共の場で芸を提供する人、大道芸人にライセンスを発行している。審査をして合格した芸に許可書を出しているという。

ある日曜日、幸いにその人たちの芸に接する事ができた。ソウヤ谷村さん、西洋ノコギリを股に挟み、弦を使ってイェスタデイやコンドルは飛ん

でいく等何曲か演奏した。二百六十本の釣糸を集めた弦の奏でるもの悲しい音色は大勢の人達の足を止めさせていた。昔懐かしい紙芝居は、源五郎さん。「黄金バット」を、声色を変え、鳴り物入りで巧みな熱弁。

また、藤和三さんはパントマイムで狭くなる壁におしつぶされていく人の様子や運ぼうとするが動かないカバン等を出し物にしていた。

NHKで放映された富樫祐子さんは、皿回しや風船を使

陶芸と出会って

松本亜理沙

中学校に勤務して二年が過ぎようとしている。今まで小学校にしか勤務した事がなく、しかも小規模校だった為、悩みという悩みも感じない生活をおくっていた。初めて中学校で仕事を始めた頃は毎日が驚く事ばかりでカルチャーショックを受けたのを覚えてい

る。常識がない、礼儀がなっていない、挨拶ができない、活気がない等感じる事が多々あった。この雰囲気の中で生活している生徒達は、思春期という事もあるがストレスが溜まりやすく、担任に悩みを訴える生徒や部活の顧問に相談する生徒、保健室で心の休養をする生徒が多い。このよう

な状況の中、ストレスを感じている先生も多いと思う。この私でさえストレスを感じる事があった。

しかしストレス発散になるものと出会う事ができた。それは「陶芸」である。八組の担任で私の師匠でもある萩原先生と八組の生徒が誘ってくれた事がきっかけである。ろくろの上で回っている粘土を自由自在に操り、あつという間に見て挑戦してみる事にした。粘土を五百グラムの丸い玉にしてろくろの上にのせ、中心をあわせる。次に粘土の真ん中に親指で穴をあけ、その穴を三本の指で広げていく。あとは、粘土を上を引き上げて作品に仕上げていく。なぜ、

い、いくつか組み合わせ、子どもも参加の演目で見せ場を創っていた。



四人の人ははいずれもソロの出演。自分のオリジナルな芸を持つことと体力を保つところに苦労があるとのこと。人に芸を見せ楽しんで、喜ん

う時がある。私が陶芸と出会えたように、生徒達にもどんな色々な事に挑戦して、夢中になれる何かが見つければいいと思っています。(墨坂中)

編集後記

紅葉した山々を惜しむ間もなく、一気に冬に向かって駆け抜けてきた今年も、残りわずかになりました。

教育改革が叫ばれる中、学校週五日制、新学習指導要領実施、絶対評価等、教育現場では試行錯誤の慌しい半年余ではなかったかと思えます。

本号は、その日々の実践の成果「教育課程研究協議会」を中心に編集いたしました。お忙しい中、原稿をお寄せくださった皆様に深く感謝申し上げます。(西澤、松澤)